

赤谷プロジェクト 近況報告

「赤谷の森」の生物多様性復元を進めるうえで、溪流の環境について考えていくことは重要な要素の一つです。そのため赤谷プロジェクトでは、「関東の森林から第34号」でご紹介したように、溪流環境復元ワーキング・グループ（WG）を設置し検討を進めています。

現在検討を進めている茂倉沢では、昭和20～30年代、台風等に起因する崩壊で発生した土砂被害を防止するため、10数基の治山ダムが設置され比較的安定した状況になっていますが、治山ダムの老朽化が進み何らかの対応を行う必要性が出てきています。

このため、関東森林管理局では、治山計画を新たに策定することとなり、治山の専門的立場から溪流環境に配慮した治山施設（溪間工）のあり方を検討する「調査検討委員会」（局治山課設置）と溪流環境復元の観点から提言する「溪流環境復元WG」が、防災機能の確保と溪流環境の復元という2つの課題について、2年間検討を行ってきました。この検討結果が、このたび調査検討委員会の報告書として取りまとめられ、基本的整備方針が示されました。詳しい内容については「関東の森林から」の

次号以降で局治山課から報告されることとなっていますが、例えば、不安定な状態になっている治山ダムを、ただ補修するだけではなく中央部分を取り壊し上流と下流の連続性を確保する試みなどは、「環境と防災の両立」に取組む先進事例としてマスクミ、専門家等からも注目されています。

治山ダムを設置した当時は、土砂の流出を止めることが必要であり、その役目を果たしてきました。従来からの治山ダムは土砂流出抑制には大きな効果を発揮しますが、一方で、上下流の動物の移動を阻害し、溪流環境に大きな影響をあたえていることも事実です。これからの治山事業は災害に対処することは当然ですが、上下流の連続性の確保など、今までの以上に溪流環境を考えて事業を進め



このダムの中央部分を取り壊す予定です



茂倉沢上流部
変化に富んだ溪相が生物多様性の基本です

ていくことが必要であり、赤谷プロジェクトでは「赤谷の森」が、このモデルとなるよう取組を推進していきたいと思えます。

（赤谷森林環境保全ふれあいセンター）